書評

陳垣編、陳智超・曽慶瑛校補

『道家金石略』

森田憲司

かねて出版を予告されていた『道家金石略』（文物出版社）が出版された。陳智超氏の「校補前言」は、一九八四年八月二八日の日付で書かれており、奥付によれば、出版は一九八八年の六月とあるが、筆者が奈良大学中国研修旅行の途中、上海の新華書店で入手することができたのが、一九八九年の三月一七日、関西の中国書専門店に入荷したのは、同じく六月の中旬であった。その頃は、入荷は極めて限定されていたようであるが、本稿執筆の時点では、普通に見られる書物となっている。陳垣の編んだ道教関係金石文資料集というだけで、この書物が、関係の研究者にいかに待望されていたかは、想像していただけるであろうが、以下、一九八九年の日本に住む研究者にとって、この書物にはどの様な使い勝手があるのかを中心に、元代の石刻史料をどの様に収集・利用していくかという問題を視点として論じていきたい。ところで、この種の書物の書評として、誰でもすぐに想起されるのは、入矢義高氏の『蔡美彪氏編「元代白話碑集録」を読む』（『東方学報』京都二六、一九五六）である。入矢氏にはとても及びはしないが、せめてその内容を参考にしつつ、論を進めていきたい。なお、入矢氏の書評は、史料操作の問題と共に、句読の問題にも重点が置かれているが、ここでは、何よりも筆者の力量不足から、その点には触れずにおくことをお許しいただきたい。

書評の例として、まず本書の体裁の紹介から始めるならば、B五版、本文一三一六頁、引用書目四頁、索引五九頁の巨冊であり、本文の構成は、漢代から明代までの道教に関する金石文が、まず王朝ごとに章を分ち、その中では、年代順に従って配列されている。各資料には、句読がほど

こされているほか、陳垣、陳智超両氏による注記も少なくなく、多くはないが、拓影も収められている。

本書の著者は、陳垣編、陳智超・曽慶瑛校補となっている。陳垣が現代中国の生んだ最大の歴史家の一人であることは、今さら紹介する必要もあるまいが、陳智超氏はその孫で、現在中国社会科学院歴史研究所に所属する。陳垣には、『南宋初河北新道教考』（一九四一、以下『新道教考』と略）という、有名な著書があり、そのための準備作業として行われた石刻史料の収集が、本書の前身である。しかし、『新道教考』の記述によれば、陳垣によって『道家金石略』と名付けられた稿本は、校訂作業の難しさなどから、箧底に蔵されたままになっていた。[1] それを、陳智超氏が再編集・校訂、さらに大幅な増補を行なって完成させたのが、今回出版された『道家金石略』であり、その経過については、陳智超氏が巻頭に付した「校補前言」に詳しく述べられている。[2]

以下、内容の検討に入るが、本書の持つ特徴は良きにつけ悪しきにつけ、『道家金石略』という題名に現れていると言える。この題名の二つの部分、すなわち「道家」と、「金石略」とに分けて、この書物について述べていきたい。

まず、後者の「金石略」からである。本書は、単に金石書や拓本を出典とするだけでなく、文集・道蔵などからも碑記の類を広く収集し、道教に関する一大史料集となっているわけであるが、前近代の中国で書かれてきた文章のかなりの割合のものが、文集などの形で今日に伝わってはいても、元来石に刻されることを目的として書かれたものであることを考えれば、金石文と各種の文献に収められた遺文とを、「金石略」の名の下に同列に集成することは一つの見識を示すものである。しかし、そのことが、一方では、「金石資料集」としての充実を期待した我々の期待とは齟齬する面を持つ結果となったことも、以下の本書の内容についての拙見から理解していただけるであろう。

また、本書の中で最も大きな比重を占めるのは、金元代の章であり（正確には遼のものもここに含まれる）、八〇〇頁にわたって八八五篇（項目数としては八八二であるが、一項目に複数の史料が収められているものがある）の金石文が収録されているさまは、壮観の一語に尽きるといって言い過ぎではあるまい。先述した本書と『新道教考』との関係を考えれば、金元時代が中心的位置を占めているのは、当然のことであり、この時代が、中国の伝統的な石刻

の学においては、『金石萃編』を始めとする金石書の収録年代の下限を見ても分かるように、一部の例外を除いては、対象の外とされることが多かったことも考えあわせれば、[3]金元時代の比重の高さは、本書の最も特徴的な点とも言えよう。ここでは、筆者の最近の関心の所在とも相俟って、この金元時代の部分を対象として、検討の作業を行っていきたい。[4]

それでは、金元の部分の内容を具体的に見ていこう。まず、検討してみたいのが、各史料の「出典」である。複数の出典があげられているものもあるが、それぞれに加算して数えてみると、拓本三四四、石刻書一一六、文集三一五、道蔵九四、解放後の調査報告や編者の実地調査に基づくもの（以下、「調査資料」と呼ぶ）四六、その他一二（地志・内典など）となる。したがって純粋な意味で金石文であるものは、六割を欠いている。

そして、この中で我々にとって興味深いのは、何と言っても、拓本と調査資料を出典とする史料であることは言うまでもない。本書で利用されている拓本の所蔵者は全国の機関にわたるが、北京大学図書館所蔵の、藝風堂および柳風堂旧蔵のものが多くを占める。藝風堂は書誌学者として有名な繆荃孫のコレクションであり、柳風堂とは張仁蠡のことであるが、彼は張之洞の子であり、[5]そのコレクションである可能性もある。このうち、藝風堂については、すでに陳垣が注目、利用しており（注1参照）、柳風堂を出典とするものは、陳智超氏による増補のようである。[6]これらのコレクションの存在については、すでに紹介されていたが、その内容がまとまって公開されるのは、本書が初めてであろう。[7]原拓へのアクセスが難しい今日、道教に関わるものに限定されるとはいえ、このように一括した形での引用紹介は、何にもまして有難いと言わねばならない。

また、恐らく内部の刊行物であろうと思われる、各種調査報告・目録類からの引用も、同様に有難いものであり、例えば、一九五〇年代になって初めて学界への紹介がなされた山西省の永楽宮は、単に道教史に限らず、この時代の研究上重要な位置を占める史跡であるが、そこに現存する石刻一八点（これで全てかと言うとそうではないのだが）が、原文を付して紹介されたのは、管見の及ぶ限り本書が最初ではなかろうか。極端に言えば、この一点だけでも、金元史研究における本書の価値は大きい。[8]

さて、拓本や調査資料に出典を持つものが、なぜ我々に

とって興味深いかといえば、それらが「新史料」である故であることは、今さら言うまでもあるまい。そして、この「新」という語には、二つの方向がある。いわば、量の問題と質の問題である。

では、「量の問題」とは何かと言えば、上で例として挙げた永楽宮の場合のように、従来知られていなかった石刻史料が、我々の共有の財産となったという点である。それがどの程度の割合にのぼるのかについては、普通我々の目にすることのできる石刻史料のリストとしてポピュラーな『石刻題跋索引』との比較が必要となるのであるが、この書物は、ある石刻が収録されているかどうかの検証という点では、必ずしも使いやすいものではないため、定量的に述べることは出来ず、印象としては、未収録のものが少なくないようであり、さらに『山左金石志』の大部分や、『関中金石記』のように、著録されているだけで石刻本文を見ることができなかったものを、目にすることができるようになったことは喜ばしい。その例としては、陝西省の西安西南一帯、そこには永楽宮とならぶ全真教の重要史跡、盩厔の重陽万寿宮が含まれるが、『関中金石記』では著録されているに過ぎないこの地域の碑刻を読むことが可能になったことを挙げることができよう。ただし、この地域の石刻の一部については、『陝西金石志』に収録されているのであるが、その事実については、『陝西金石志』が本書の「徵引書目」に挙げられているにもかかわらず、全く言及されていないという、不可解な事実が一方では存在する。(9)

それでは、金石書を離れてはどうか。現在、多くの石刻史料を含むことで注目されている存在に、地方志がある。数年前に台湾から出版された『石刻史料三篇』は、多くの地方志所収の石刻史料を研究者に身近なものとした。これに対し、本書巻末の「徵引書目」を見ると、道蔵関係などの豊富さに比して、地方志については、道教史上重要な史蹟のある地域のものが選ばれてはいるが、わずか十点と、その少なさは特徵的ですらある。確かに地方志には様々なものがあって、石刻について詳しい地方志でも、官衙や儒学等についてのそれが中心で、道教などについては冷淡なものも多い。しかし、もし道教関係の資料の集成を目指すのであれば、やはり、地方志史料の発掘の手薄さは問題点とされるであろう。金元時代に関して言えば、全真教発生の地である、山東半島北部の渤海湾沿岸部の、莱州・登州の領域、例えば福山・寧海といった各地に関しては、地方志

を利用すれば、もっと多くの資料が得られたはずである。[10]今我々に、『新道教考』執筆当時の陳垣が、そして校補にあたっての陳智超氏が、地方志史料の利用についてどの様な立場におかれていたのかを知る事は出来ないが、やはり不満の残る点ではある。

次に「質」の問題に移ろう。質の面で、まず第一に感じる本書の有難さは、「複本」が出現したと言うことである。膨大な数が現存する金元時代の金石文史料ではあるが、個々の史料について見てみると、例えば『石刻題跋索引』を検索すれば分かるように、一種類の書物にしか移録されていないのが普通である。従って、史料として利用する時、本文に疑問が生じても、他本による検討の余地がなかったが、今回本書で拓本から移録された史料については、我々は複本を得たことになる。この価値は、現実に金石文を史料として利用された方なら、首肯されるであろう。

ところで、我々が金石文を資料とする時、その最大の魅力は金石文の持つ同時代性にある。また、権利関係に関わる石刻においては、主張の根拠となる文書を原形のまま刻する例があり、古文書の残存の少ない中国においては、研究者を引き付ける。しかし、一般的に利用される清朝以来の金石学の蓄積は、その欲求を満たしてくれるとは限らない。用字や体裁、とくに改行と空格などの問題をはじめとして、本来ナマのものであるはずの原資料の姿を、必ずしも忠実に再現してくれているとは限らないのである。本書ではどうであろうか。結論としては、はなはだ不満足と言わざるを得ないのである。すなわち、本書の本文の形式は、簡体字、ベタ組み、加点というものである。これではどうしようもない。[11]残念ながら編者の関心は、本文の内容にのみ在って、文書史料としての石刻という視点、とくに文書形式をめぐるそれには、ないようである。

現実に体験すれば分かるように、拓本を「読む」ということは、学問的にも、さらには物理的にも、決して容易な作業ではない。すでに陳垣は、本書を稿本で止めている理由として、「校讐不易」を挙げているし、陳智超氏は、陳垣の利用した拓本を用いて本文を校訂するために、片道数時間をかけて自宅から北京大学の図書館まで通われたという。そのように苦心して作られた本文が、昨今の中国における出版状況のゆえに、このような不満足な形でしか出版できなかったことは、惜しみても余りあると言わざるを得ない（もっとも、陳垣の遺著でなければ、これほど浩瀚な

史料集が出版できたかどうかすらも分からないが)。恐らく編者の意図には反することなのであろうが、文集や道蔵を出典とする史料、それは今の我々には、決して目にし難い物ではないだけに、それらを省いて、純粋な金石文史料のみの史料集となっていれば、せめて改行・空格の問題なりとも、物理的に解消されていたのではないだろうか。さらに言うならば、拓本に基づく史料に関して、それぞれの法量・書体などが注記されていることは有難いが、聖旨碑を中心とする「白話碑」におけるモンゴル文並記の有無は、ほとんど無視されており、原碑の形態を推測することができない。本書も出典の一つとしている蔡美彪氏の『元代白話碑集録』がこの点を必ず注記しているのと比較すれば、後者が言語史資料としての性格を強く持つとはいえ、その違いは明瞭である。(12)

本文の移録に関しては、もう一つ題名の省略と言う問題がある。宗教関係の碑刻では、その事業や立碑に関係した人々の名前を、碑陰に刻むことが少なくないが、これらの人名は、単に宗教集団の構成員を考える上だけではなく、しばしば、地域社会研究や官僚制度研究に関しても有益な史料となっている。しかし、本書では、宗教関係の肩書を持つ場合を除いては、場合によっては官員をも含めて、それらの移録を省略する場合が少なくなく、筆者の気付いただけでも一四件にのぼる。たしかに膨大かつ繁瑣な人名群であり、その作業の労力を考えるとやむをえない面もあろうが、これらの史料は金石文以外には求め難いものであり、研究者にとっては、欲求不満の生ずるところである。

さらに、本文の移録、とくに個々の文字には問題が無いのであろうか。たまたま拓本や原碑の写真が手許にあった一、二の例に関しては、問題はなかったのであるが、次のような場合もないわけではない。それは、「重建昊天宮碑」(六六四頁)の場合である。この碑は、山東省の益都郊外にある駝山の上に現存し、今までにも、『益都金石記』(巻四)や、『益都県図志』(巻二八)などに、収められている。この碑の碑陰に関して、本書では、「碑陰:宗派之記」と題して、一九名の道士の名前の掲げられた宗派図が、移録されている。今筆者の手許には、この碑そのものと拓本とのそれぞれ写真があるが、いずれを参照しても碑陰の状況はこの様にはなっていない。碑陰の上には「題名之記」という横大字があり、その下は、細い線で区切られて、「助緣功徳」と「宗派之図」に分かれている。本書に引用され

ているのは、この「宗派之図」の箇所に対応するが、しかし二つの区画は不定形で、「宗派之図」のみが拓本になっているとは考えられない。にもかかわらず、本書は「助縁功徳」の部分の存在にすら言及していない。一体なぜこの様なことが生じたのであろうか。先に指摘した人名への軽視と同じ事情によるものであろうと思われるが、この様な例があると、この書物全体への疑問を生じさせる。以上のような点は、史料の「質」という面での、本書の問題点と言えるであろう。

この書評の初めに、書名を「道家」と「金石略」の二つに分けて考えると述べた。次に「道家」についてである。この書物における「道家」とは何を指すのであろうか。他の王朝の部分は、単に年代順であるのに対し、金元の章は、(1)全真派、(2)真大道派、(3)太一派、(4)正一派、(5)帰属不明者、となっている。これは、陳垣が最初『道家金石略』を編んだ時から同様であった。陳垣によれば、原本では、その金元の部分の内容は、一割が道教旧派、二割が真大道・太一道で、残り七割が全真教であったという(注1参照)。これに対し、本書における比率を見てみると、帰属不明のものを除いた比率は、全真六六%、真大と太一をあわせて七%、正一が二七%と、帰属不明の三一七件の存在も合わせ考えると、陳智超氏の増補が、元代の「道家」関係の金石文全体の集成を目指したものであったことがうかがわれる。

しかし、この分類から分かるように、ここで言う「道家」とは、教団道教を指すようである。一方で皇帝による祭天に関わる石刻は収められていながら、「帰属不明」の箇所を見ても、いわゆる民間信仰に関わる石刻は少なく、収録されているものについても、どのような基準によって選ばれてきたのかが、よく分からない。金・南宋から、元にかけての時代は、現在も信仰されている、媽祖や関帝、文昌帝君等の信仰が全国に広まった時期であり、色々な神々の祠廟についての石刻が残存していることは、この時代の金石文を少しでもかじったことのある人なら気付くところである。しかし、それらの史料は、本書にはまったく収録されてはいない。例えば、城隍廟に関する石刻はたった一篇しか収められておらず(「重修鞏昌城隍廟記」七五四頁)、これも、全真教とのかかわりの故の収録である。

胡聘之の『山右石刻叢編』といえば、山西における金石文の基礎的集成であり、『道家金石略』でもしばしば引用されている。いま、この書物の元初から大徳初年に至る箇所

（巻二四―八）の九二件に関して、そこに含まれる史料のうち、我々の感覚で「道教関係」と見なしうるものについて、本書での採録の有無を調べてみた。結果は、三五件中収録は一六件となる。未収録の中には、后土廟のように、道教と呼ぶことに躊躇されるものもないわけではないが、例えば解州の塩池廟の石刻がまったく無視されていることなどは、先に書いたような、本書の言うところの「道家」の反映であろうか。本書の出版予告を見て、筆者の期待したのは、この方面の史料であった。というのは、官撰である各種地方志はもとより、各石刻書の類でも、この方面の史料の収録は、従来必ずしも十分ではなかったことを感じてきているからである。ことこの点に関しては、期待は全く裏切られた。

このようにしてこの史料集について考えていくと、ますます金石文の現物もしくはそれに準ずるものとしての拓本、さらにはせめて、拓本の図版への欲求が高まる。本書にも図版がないわけではないが、収録点数も少ない上に、残念ながらとても鮮明とは言い兼ねる代物である。最近刊行の始まったばかりの、全百冊という『北京図書館所蔵中国歴代石刻拓本匯編』が、どの様な形で我々に北京図書館所蔵の拓本を公開してくれるのかが、第一の期待される点であるが、本稿執筆の時点で到来している冒頭の数巻を見るかぎり、図版の精祖、大小はまちまちのようである。

この文章の初めに、本書に収められている拓本へのアクセスの難しさを考えれば、そこに本書の意義の一つがあると書いた。日中を含め世界各国における拓本の収集と公開利用の現状については、エール大学のハンセン女士が書かれているが（Valerie Hansen, "Inscriptions: Historical Sources for the Song", *The Bulletin of SUNG YUAN Studies* No. 19, 1987, pp. 17-25）、拓本が一種の文物として扱われ、接することの難しいことは、わが国においても同様である。現物の取扱いの難しさと損壊の危険は理解できるが、せめてマイクロ化してでも公開は促進されるべきであり、そうなった暁には、上で述べた本書の持つ問題点の幾つかは、原拓本を見ることによって解決できるはずである。

以上、本書の持つ特徴と問題点について述べてきた。最初にも書いたように、この文章は、一九八九年の日本に住む研究者の立場から見てのものである。設立されて日の浅

い奈良大学に勤務する筆者においてさえ、『石刻史料新編』初―三編（地方志に関しても、これでかなりカバーできる）、『元人文集珍本叢刊』、『四庫全書珍本』さらには『道蔵』や『永楽大典』などの影印本といった風に並べていった時、本書の出典となっている史料群のうち、拓本と「調査史料」以外のもののほとんどが、身近で利用できることが分かる。そうであればこそ、上で述べたような本書への不満が出てくるわけであり、もし、これが二十年前、いや十年前でも、本書の博捜は、大変な歓迎を受けたであろう。ひるがえって、本書の原出版地である中国における、研究者と史料とを取り巻く状況については、筆者は明らかにしないが、おそらく我々とは違った目で迎えられているに違いない。我国における史料とそれへのアクセスの状況の変化は、明らかに研究の動向に反映してきた。それに対し、本書がさらにどう影響するかは、興味深い問題である。

（一九八九、一〇、一七）

この書評を書くにあたっては、京都大学文学部羽田記念館で行われている「元代の石刻を読む会」において、一九八九年九月一一日に行った発表を基礎とした。竺沙京大教授を始め、当日参加され、有益な意見をいただいたこの研究会のメンバーの方々にお礼申し上げたい。また、この文章は、平成元年度三島海雲記念財団研究奨励金の中間報告でもある。あわせて記して関係の各位にお礼申し上げる。

〔注〕

（1）余昔纂道家金石略、曾将道蔵中碑記、及各家金石志・文集・並藝風堂所蔵拓片、凡有関道教者、悉行録出、自漢至明、得千三百余通、編為百巻。顧以校讐不易、久未刊行。其金及元初部帙、十之一属道教旧派、十之二属大道太一、十之七皆属全真…

（2）本書の校補が、何時、どのようにして行われたのかは、不明な点も残る。例えば、『民族語文』の一九八四年六期には、河南省許昌縣の天宝宮にある、後至元二年のパイリンガルの白話聖旨碑が紹介され、陳智超氏自身が解題を書いている。しかし、この碑には本書には収められていない。

（3）例えば、やはり近着の徐自強編『北京図書館蔵石刻叙録』（書目文献出版社、一九八八）は、法帖を除いて隋唐で終わっている。

（4）本書の唐代の部分の出典を見てみると、拓本に基づくとされているものも、ほとんどは旧来の金石書にも見られる史料であり、他に出典があげられていないものは、一六件にしか過ぎない。このような部分においては、研究者にとって本書の持つ位置も、新史料を多く含む金元の箇所とは、自づから異なるはずであり、その時代を専攻される方によって、然るべき書評が

なされることを期待する。

(5) 張仁蠡については、民国二三年刊『霸縣新志』の巻三に史料があり、彼が張之洞の末子であることの他、青島のドイツ専門学校の出身であること、民国一九年に霸縣の県長となったことなどが分かる。

(6) 陳智超氏によって増補された史料には、目次に＊が付されているが、金元に関しては、柳風堂のもので＊が付されていないのは、一件のみである。

(7) 藝風堂については、繆荃孫自身に『藝風堂金石文字目』の著があって、その存在が知られている(『石刻史料新編』所収)。なお、北京大学図書館に、この二つのコレクションが存在することについては、蔡美彪「涇州水泉寺碑訳釈」(元史論叢三、一九八六)の中で述べられているほか、後掲の Hansen 論文でも言及されている。

(8) ただし、注2で述べたような例もあり、解放後新出の史料がどの程度カバーされているかは、よく分からない。新出紹介の石刻史料については、気賀沢保規氏が、雑誌『書論』に連載されている「中国新出石刻関係史料目録」が、有用である。

(9) 本書所収の金石文で、『陝西金石志』に見出だされるものは、著録三件を含めて二八件もあるにもかかわらず、『陝西金石志』との関係に言及されているのは一件のみである。

(10) 尤も、やはりこの地域に属する掖県のように、『山左金石志』に、多くの著録がありながら、石刻の移録について歴代の地方志が冷淡であることが、関係の研究者を嘆かせていたものが、本書によって、はじめて本文をまとめて見ることができるようになった例もある。また、多くの重要な史料を含みながら、利用のしにくかった『成化山西通志』を出典として用いているのは注目に値するが、金元に関しては、活用されていない。

(11) しかも、浚県と濬県のように簡体字と正字が混在して用いられている例すらある。

(12) 『元代白話碑集録』にある注記も転記されていない。